

恩田侑布子

しろがねの露の揉みあふ三千大千世界
荒星のはなれ離れの故山かな
筆筒に孔雀の羽や冬深し
冬川のゆくどこまでも天とゆく
一人とは冬晴に抱き取られたる
男来て出口を訊けり大枯野
風呂吹や時間うるむといふことを
越え来るうみのおく山湯婆抱く
南無といひそのあとはなし冬日向
冬濤のくずほるととき抱く碧
ゆきゆきてなほ体内や雪女
破魔矢抱くわが光陰の芯なれと
くろかみのうねりをひろふかるたかな
香水をしのびよる死の如くつけ
片かげを滅紫に吉野川
素戔嗚尊の眉吹き飛ばす瀑布かな
ころがりし桃の中から東歌
酢牡蠣吸ふ天の沼銚のひとしづく
富士浮かせ草木虫魚初茜
百態の闇をまとひて踊るなり
落石のみな途中なり秋の富士
葛湯吹くいづこ向きても神のをり
汝が神のわが神でなき寒さかな
一族の絶えし火鉢を熾しけり

天網は鵲の巢に丸めあり
長城に白シャツを上げ授乳せり
告げざる愛地にこぼしつづ泉汲む
脚入るときやはらかし茄子の馬
送火を見る乳足らひし嬰の如
三つ編みの髪の根つよし原爆忌
吊し柿こんな終りもあるかしら
缶蹴りの鬼の片足夕ざくら
好きなのは青紫蘇、名誉なき男
クメール語大夕焼を沈めたる
あめつちは一枚貝よ大昼寝
椿落つ鏡の中にもう一人
瞑りても渦なすものを薔薇とよぶ
驟雨いま葉音となれり吾も茂る
月光に緊まりし身体ぶつけ来し
死ぬるまで黙す障子の縦と横
戀絶てば身にしお檜の香なりけり
海百合のかひなの永し冬の戀
この亀裂白息をもて飛べといふ
柱なき原子炉建国記念の日
あはゆきや塔の基壇の彩漆
爽やかに入り混じりたり貝と砂
なあと云ひさしてたゆたふ櫻炭
冬天に孕んで紅し女郎蜘蛛
わが視野の外から外へ冬かもめ
天天とみづまなこにもさくらにも